

# リスクを持ちながら通院している妊婦の出産に向けての思い

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 亀田 幸枝, 島田 啓子, 田淵 紀子, 関塚 真美, 坂井 明美   |
| 雑誌名 | 日本助産学会誌 = Journal of Japan Academy of Midwifery                                 |
| 巻   | 18  |
| 号   | 3   |
| ページ | 324-325   |
| 発行年 | 2005-01-01  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2297/34927">http://hdl.handle.net/2297/34927</a> |

doi: 10.3418/jjam.18.3\_324

## リスクを持ちながら通院している妊婦の出産に向けての思い

金沢大学医学部保健学科 ○亀田 幸枝  
" 島田 啓子  
" 田淵 紀子  
" 関塚 真美  
" 坂井 明美

### I 緒言

近年、医学の発達による不妊治療後の妊娠や多胎妊娠、晩婚化に伴う妊娠年齢の高齢化や子宮筋腫等の産科的合併症のリスクを持ちながら妊娠・出産する女性が増加している。こうしたリスクを持つ女性は必ずしも入院管理が必要ではなく、外来通院をしながら妊娠生活をすごすことも多い。先行研究では、入院中のハイリスク妊婦の思いやケアに関する調査はみられるが、リスクを持ちながら通院している妊婦の思いは明らかにされているとは言い難い。そこで今回、リスクを持つ妊婦の出産までの思いを探ることを目的とした。

### II 方法

対象は、A総合病院にリスクを持ちながら通院している妊娠37週から40週の妊婦7名(初産6名、経産1名、子宮筋腫、双胎、高齢初産、不妊治療後の妊娠)である。データ収集は2003年6~12月の期間に、研究の主旨を説明し同意が得られた方に半構成的面接調査を行った。面接内容は、対象者の許可を得て録音し逐語録にした。得られたデータを内容分析し、リスクを持つ妊婦の出産までの思いを抽出した。倫理的配慮として、データは研究目的以外には使用しないこと、プライバシーの守秘、中断による看護への影響はないことを保証した。

### III 結果

図1に示すように、リスクを持ちながら通院している妊婦は、<壁をこえる>という作業をしていた。その<壁をこえる>ということは、胎児が健全にうまれてくるという見込みをもつことである。壁になるものには、生まれても安全と思える<在胎週数>、<胎児の体重>があった。<壁をこえる>までの思いは<胎児が生きていることの確認と安心感>であり、逆に<壁をこえた>後では、<健在であり続けることの安定した保証>を基盤にして、出産様式への思いや医療者に託すという気持ちを抱いていた。さらに、<壁をこえる、こえない>に関わらず、リスクを持つことについてまわる思いが明らかになった。

#### 1) <壁をこえる>までの思い

児の生存と成長についての思いを寄せることが中心で、「胎動がある」、「超音波でみえる」、「児が標準の大きさであった」と、胎児が生きていることのサインを確認して安心感を得ていた。同様に母親は、「どこまで動いていいかわからない」、「そととすごす」など、流早産しないで育つのかどう

か、妊娠が継続できるかどうかの不安を抱きながら、日常生活を加減してすごしていた。

## 2) <壁をこえた>後の思い

母親が目指していた児の成長、つまり胎外生活可能な時期に至ったことが壁をこえたと思えることであった。<壁をこえた>後の思いについては、児が元気に生まれてくる見込みを感じてくるようになった母親は、「積極的に動く」、「これから少し歩かない」と、それまでの加減した生活から一歩でるような思いで出産にむけて行動していた。また、それまでの生活や年齢から出産時の体力への自信のなさを感じており、出産に向けては「自分にできることはやった、後は医療者の言うとおりと、最後は医療者に託すという思いを抱いていた。児が元気に生まれてくるのが最重要であるため、健診をうけることで児の健在性を確認し、近づく出産に対しては、「自然分娩できればいいがダメなら帝王切開」、「経過はどうであれ最後は産まれる」と、出産様式には必ずしもこだわっていなかった。そういった帝王切開になる可能性を頭の片隅におき、「大きな病院なら大丈夫」と緊急時の体制が整った施設で出産するという思いが、元気な児を得るための保証になっていた。そして、外来健診や妊婦教室などを通して、元気な児の出産を託すといった医療者に信頼感を持ちつつ、出産に向けて「消えない不安と大丈夫」という気持ちのゆれがあった。

## 3) <壁をこえる、こえない>に関係なく継続する妊婦の思い

出産に向けて順調に経過していても、「予想外のトラブルがおこらないように」、「(今は順調だけど)最後まで安心できない」と児の誕生まで気を抜けない思いが続いていた。

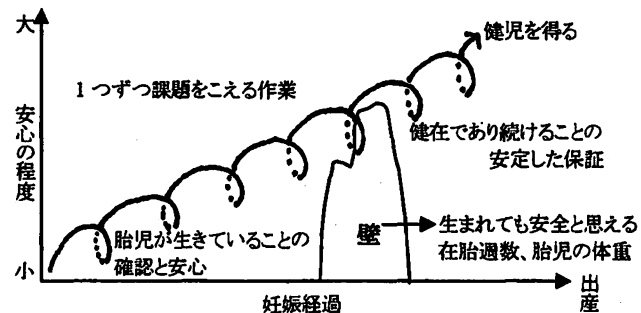


図1 リスクを持ちながら通院している妊婦の出産に向けての思い

## IV 考察

入院している妊婦の思いについて名取(2002)は、胎児の健全性と自分の日常性への回復を願い、入院生活の効果をはかりながらゴールの修正を行っていると報告している。これは、今回の<壁をこえる>作業と類似していると考えられ、外来でリスク管理を行いながら妊娠生活を送っている妊婦に対しても、1つの目標である<壁をこえる>ことに意識して関わっていくことの重要性が示唆された。しかしながら、壁の設定は、主に医療者やピアグループの情報からと推察され、壁のありようによっては、希望をもてたり落ち込んだりという妊婦の思いがあると考えられる。妊婦の壁のありようを察知し、妊婦の思いを理解して関わることの重要性が示唆される。

## V 結論

リスクを持ちながら通院をしている妊婦の思いは、胎児が健全であるという見込みをもてるという<壁をこえる>作業であった。その壁になるものには、生まれても安全と思える<在胎週数>、<胎児の体重>があった。

文献:名取初美、マタニティサイクルにおける長期入院の意味—妊婦の体験世界と意味付け—、金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻修士論文、2002。